

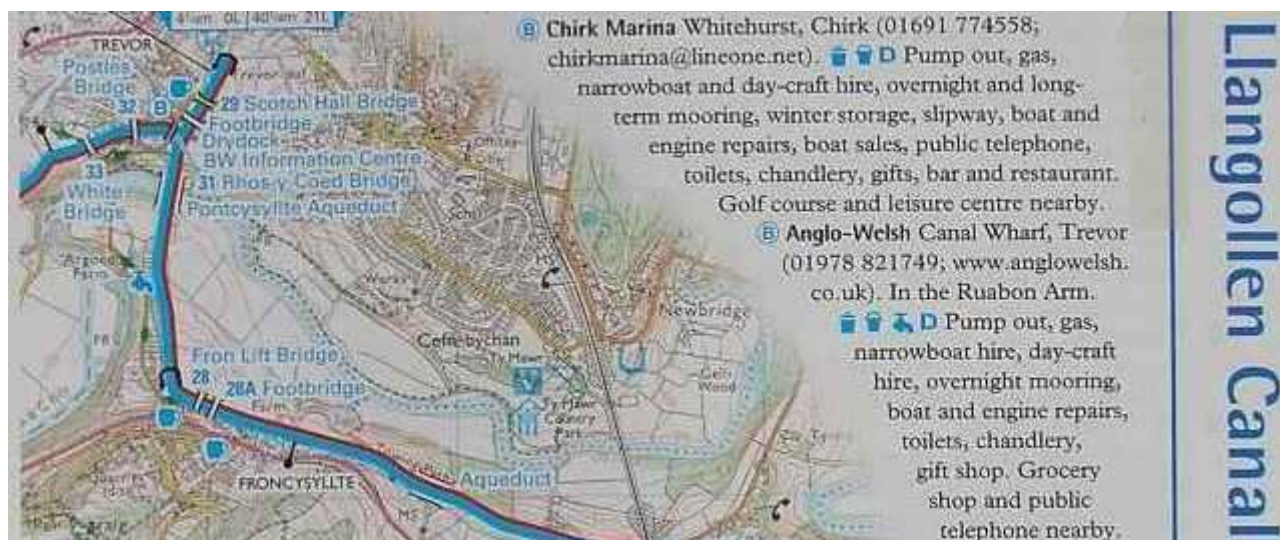
## ナローボート巡航記（運河の旅）No. 8・最終号（02/Oct/2007）

クルーズ六日目（2006年9月7日・木曜日）

08:00 Llangollen 発。これから二日かけてボート・ヤードに帰ります。今朝、オイル・ヒーターの効きが悪く、少し寒くなって目が覚めました。どうやらヒーターの循環オイルを温めるバーナーが発火していないらしい。あと二晩、船に寝るわけですから何とかしなければいけません。9月初旬とはいえ深夜の冷え込みは完全に晩秋の気配で、鋼鉄の船の中は暖房がないと快適ではなくなってしまいます。 オフィス・アワーになってから適当な所でボート屋に電話することにして、とりあえず走り始めました。

これからの進行方向は上(北)から下(南)へ、左(西)から右(東)へです。ここからの道中は来た道を帰るわけですから新鮮味はありません。けれども、動くものに乗っているときは誰でも大抵進行方向を見ていることが多いので、同じところを通るにしても視線は180度違います。だからそれなりに面白く、退屈することはありません。

ボート屋は進行方向にあるのだから、電話するのも特に急ぐ必要はないわけで、むしろ遅くなった方がそれだけボート屋に近くなり、待つ時間が短くなって都合がいいとも言えます。結局昨日通った Pontcysyllte Aqueduct を渡りきったところ、28番の跳ね橋の手前でボートを舫い、電話をしました。



上の図で、28番の橋のすぐ左下に青ジョッキがありますね。

そして、そこはちょうど赤い線の道路が運河と並行していて、車で修理に来てもらうには好都合です。

しかも青ジョッキがあるんですから悪いはずはありません。エールでもちびちびとやっていたら待つ間の苦痛などないわけです。ジョッキ・マークはその名も Aqueduct Inn というパブリック・ハウス(public house=pub=パブ)。



Inn と言うんだからここも当然酒場兼宿屋なんですね。大都市のパブはどうか知りませんが、田舎では、町から離れたところにあるものは勿論、町中のパブでも宿屋を兼ねている所が多いようです。

看板の右下の窓がこのパブの酒場部門、というのもヘンかな、まあ、とにかくバーのある部屋で、ここからの眺望は申し分のないものでした。



これがその窓から運河を見下ろしたところです。運河が先の方で左へゆるくカーブしてますね、そしてもう一度右へ少しカーブするとその先にアクエダクトがあります。このパブは丘の斜面に建っていて、バーのある部屋は三階建ての二階部分ですから前には遮るものもなく運河が見渡せます。ナローボートが何隻か舫ってありますが、手前から4隻目の白い屋根が私たちのボートです。写真のように運河をカヌーでツーリングしている人も時々見かけます。

そして、左手前の柵のある煉瓦造りの民家で電話を借りてボート屋に救援要請をしました。柵の手前が公共駐車場になっていてこれも好都合です。こういうときに例の橋番号がものを言います。28番の橋から上流に向かってすぐのコーナーにある駐車場で待っているから、と言ったら一発で話は通じました。

電話を貸してくれた煉瓦の家の主もやはりリタイヤ組で、現役の時はマンチェスターにいたのだけれど、退職してから運河に面したこの家を買って移り住んだのだそうです。この家のロケーションが気に入って買ったのだそうで、大いに満足しているようでした。但し彼はナローボートは持っていないとのこと。ボートは物入りだからねー、と言っていました。

30分程待っているとボート屋が着き、色々調査した結果、燃料レベルが下がってしまいバーナーに吸い上げる事ができなかったのだと判明。再び燃料を取りに戻って行きました。ボート屋の完全な手落ちです。ヒーターの燃料の残量チェックを忘れたんですね。

それにしても、こういうところがこのタイプのボートの実に旧式なところで、燃料計はおろかレベル・ゲージさえついておらず、残量を確認するには棒を突っ込んで見るしかないんです。計器を付けるとは言わぬまでも、せめてガラス管のレベル・ゲージぐらいつけたらどうかと思いますけどネー。そうすればこんな初歩的な間違いはない筈です。ごく簡単なことなのに、なぜ？とってしまいます。

利便性を追い求めない、という固い決意か？

昨日見たプライベート・オーナーのボートなんかは多分各種計器完備でしょう。



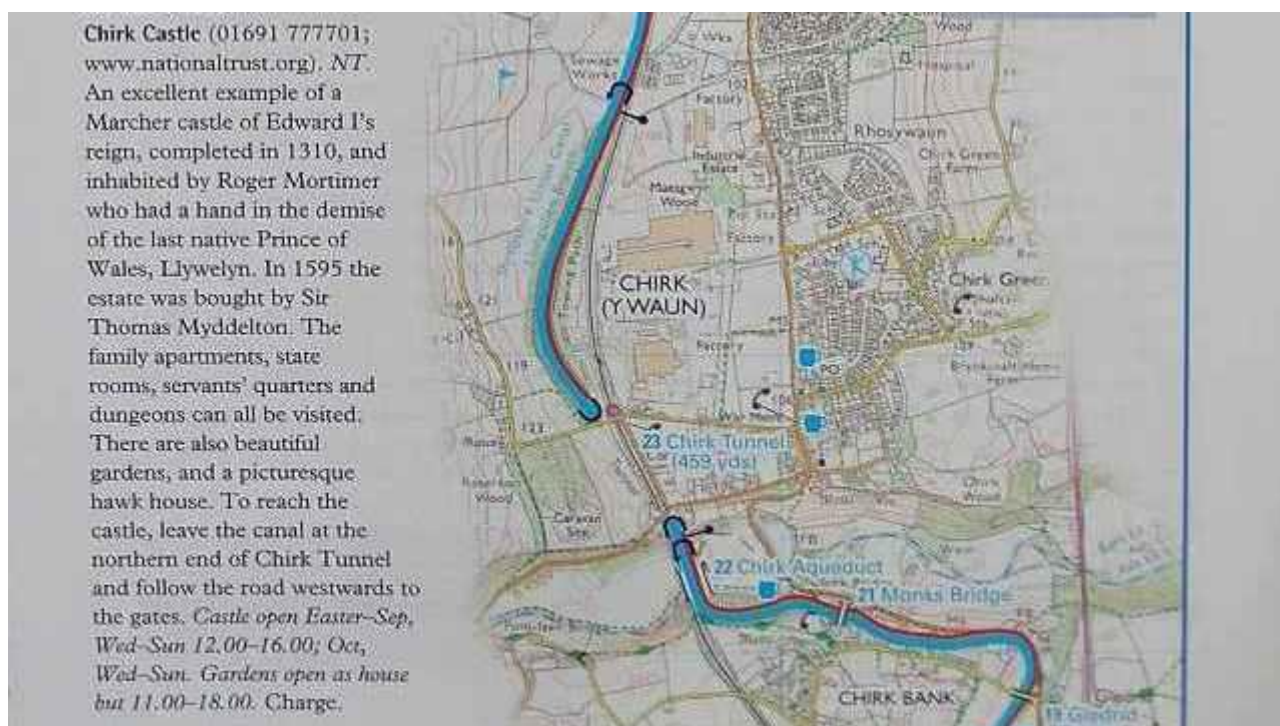
燃料の到着を待つ間に **Aqueduct Inn** でサンドウィッチとエールの昼食。  
その後、パブの裏手の道路を散歩していたら、思いがけなくアクエダクトを見下ろす場所がありました。今さっき渡ってきた **Pontcysyllte Aqueduct** で、その向こうに見える集落は一昨日泊まった **Trevor** です。  
さて、サンドウィッチ&エールのランチが終わる頃には、燃料の補給も終わって再び出発。



こっちはもう一つの水路橋 **Chirk Aqueduct** です。巨大なアーチは並行して走る鉄道橋。アクエダクトの下には牧草地が広がり点々と羊が草を食べています。今日・明日のスケジュールは時間的に十分の余裕があり、先を急ぐ必要はさらさらありません。午後も早い時間に **22 Chirk Aqueduct** と **21 Monts Bridge** の間でボートを止め、今夜はここで泊ることにしました。  
ボートを舫ったのはこんな所、運河が少し左に曲がってもう一度右に大きく曲がった先に、さっきの **Chirk Aqueduct** があります。



クルーズ七日目（2006年9月8日・金曜日）



今日は Chirk Castle 見物です。

お城の位置は、前の地図中央の 23 Chirk Tunnel の北端で運河を横切る道路を西に進み、図の左側に書いてある城の説明文の中央右端、visited, beautiful, picturesque などの単語のあたりです。

お城へ歩いてゆく途中、アケダクトを見下ろせる場所がありました。この写真を撮った場所の真下がトンネルの南側入り口です。ボートの舳つてある場所はアケダクトを渡った向こう側の木立の中。



次の画像が Chirk Castle です。

ノドカを絵に描いたようなところですね。この城は解説によると1310年竣工とのことですが、その後ずっと貴族の館として使われていたようで、それだけに保存状態も良好なのでしょう。もともとこんな平城ですからあまり戦闘的な物ではなく館としての性格が勝っていたのでしょう。

スペインでも同年代の城はたくさん見ましたが、どれも傷みの度合いが激しかったように思います。それはそのままその城が過ごしてきた戦闘の長さや激しさの

証でもあるのでしょう。有名なアランプラ(アルハンプラ)宮殿も上の写真の城と同年代に完成されたものですが、これなぞはスペインでは保存状態の良い数少ない例外の一つだと思います。



もっとも、そのアランプラもアメリカ人作家によって今の世に紹介されるまではすっかり荒れ果てていたのだそうです。その後スペイン政府もこの文化遺産の価値を認め修復作業を始めた、という経緯があるらしい。

しかし、その中の一部分、戦闘的城郭であるアルカサバと呼ばれる部分は、やはり傷みが激しいことは覆うべくありません。

イギリスの史蹟をそれほど多く見たわけではありませんが、概してスペインよりは保存状態がいいような気がします。スペイン、特にアンダルシアでは城も大聖堂も、かなり荒れた印象があります。大理石の部分は別として全体にイギリスの石より柔らかいものが多く使われているのでしょうか。特にムーア人の遺跡は日干し煉瓦が使われている部分が多いので風化が激しいようです。



さて、私たちの運河クルーズもそろそろ先が見えてきました。昼食後 Chirk 発。最終日の今日金曜中に出発点に戻っておけば、ボートを返す土曜日の朝、あわただしく用意をしなくてもよいわけです。

最後の朝はゆっくり起きてしっかり朝食を食べて、ボートを返して、駅までのタクシーを呼んでもらって、と全て滞りなく進めるためにも、返却日の土曜にはなるべく走らないで済むようにしておいた方が得策です。



ボート・ヤードに向かって最終ルートに行くボート。

このあと、二つのロックを今度は高水面から低水面に下りました。そして、ヤードの前に舫い、最後の夜はボート屋の隣地にあるパブで夕食。

それにしてもイギリス人はまずいもの食べてますねー。イギリスの外メシで旨いものを食べたという記憶がありません。そんな店でも千客万来というのがどうにも摩訶不思議・・・。

こうして私たちの運河クルーズの一週間はあっという間に終わり、翌朝、土曜の

朝、ボートを返し、タクシーで Gobowen 駅に・・・。

帰路は往路とは違い Wolverhampton という駅での乗り換え一回という経路でロンドンに帰りました。そして、友人夫妻とはユーストン駅で別れ、私たち二人は娘の住むロンドン西郊のメイドンヘッド Maidenhead へ行ったのです。メイドンヘッドでは、スペインへ渡った時と同じB&Bに泊まったのですが、アイリッシュの女性オーナーもマネージャーも私たちのことをよく憶えていて、大いに歓待してくれました。



これがそのB&Bです。町はずれの高台にある古い木造住宅を改造したもので、古色蒼然としていますが、内部は清潔で部屋も広く快適でした。街灯の電柱のすぐ右に見える出窓のある二階の部屋が、スペインに渡る前も今度も私達の部屋でした。

イギリスやアイルランドを個人旅行するとき、B&Bに泊るのはいい選択だと思います。私たちの少ない経験からも、同じ料金レベルの三ツ星以下のホテルなんかよりはずっとマシと言っていいでしょう。何よりいいのはオーナーの目が行き

届いていることです。 ホテルは四つ星以上でなければ、という方には用のない  
情報ですけどね。

このB&Bに泊って一週間のんびり過ごした私たちは、9月半ばに長崎入りし、  
とりあえずウィークリー・マンションに落ち着いて部屋探しを始めたのでした。  
長崎入りした直後、猛烈な台風直撃の洗礼を受けたことも今ではいい思い出の一  
部になっています。

あれからもう一年。長崎の中心街は過去にも何回か来て知ってはいたものの、結  
局、住み着いたのは東長崎という見知らぬ土地でした。しかし、私たちは何の違  
和感もなくこの地になじめています。五年前、ほとんど言葉も分からないスペイ  
ンにさえスイッと入れたのだから、言葉の通じる日本でなら当たり前かも知れま  
せんけどね。

何はともあれ、ここ長崎を終の棲家としたことは大正解だったという思いを強く  
しています。そして、不思議なことに、長崎の人情にはスペインに通じるところ  
がとても多いとも感じています。それも、私たちが住み心地がいいと感ずる要因  
の一つかも知れません。

言葉も人当たりも優しく心地よく、人々は生活を楽しむことを大事にして、お祭  
り好き。アンダルシアで感じた居心地の良さとおんなじです。

さて、「カァディスからの手紙」はこれにて本当に完結です。長らくのご愛読あ  
りがとうございました。 さようなら。

Hasta siempre. (アスタ・シエンプレ=ごきげんよう、またいつの日か・・・)

R・N

\* \* \* \* \*